

Title	<書評> 『冷たい親密性』
Author(s)	千葉, 和矢
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 99-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5778
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『冷たい親密性』

Eva Illouz

Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism

London: Polity Press, 2007

千葉 和矢

本書『冷たい親密性——感情的な資本主義の形成』(Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism)は、感情と資本主義のかかわりに焦点を置いて、男性と女性の純粹な関係性、性的にも感情的にも対等な関係が実現できる可能性を探求し、性差に基づく社会的権力関係を批判している。本書の著者であるエヴァ・イロウズ(Eva Illouz)は、一九六一年にモロッコで生まれ、現在はエルサレムのヘブライ大学で、社会学の教授職にある。研究対象は、コミュニケーションと文化的に構成されたものとしての感情のかかわりであり、本書では社会哲学者のテオドール・アドルノ(Theodor Adorno)に依拠しながら、権威主義的パーソナリティや社会的権力関係としての資本主義をとりあげている。感情は資本主義社会において、商品化(感情労働)や心理学的言及・ナラティブセラピーを通して、変質を続けていると彼女は主張する。

「感情」という視点は、従来、心理学や生理学、精神分析の領域で扱われてきたものであったが、近年、感情と社会学を結び付ける試みが行われている。その背景に置かれているのは、行為という概念である。私たちの行為は必ずしも自覚的で理性的であるとはいえず、感情によって動かされる場合や特定の感情を求めて行為する場合も多い。近代科学は感情を客観的に観察不可能かつ論理的に再構成不可能なものとして取り残してきた。感情社会学はそれを対象化し、他の社会制度や社会的経験過程との関連において分析しようとする。

本書でイロウズが用いる「感情」は、行為に向かって人々を駆り立てるものであり、行為に付与されたエネルギーである。イロウズの「感情」の捉え方は、感情が初期の社会や文化と切り離されず、自己や自己に対

して文化的に同時期に位置している他者と常に関係しているという事実に着目するものである。感情は、深い内省的なものであるために、行為の側面に必ずしも反映されるとは限らない。むしろ、幾重にも含まれてゐるため我々が気づかないのである。それゆえに、感情を理解するためには、自己の内から生じる社会的行為を理解することが必要であると同時に、解釈学的な社会学を展開することが要求される。なぜなら、感情的な行為によるムードの出現、たとえば、相互行為を通じて現れる怒りや悲しみといった感情の出現する状況に注意を払わなければ適切に社会を解釈したことにはならないからである。

また、序論において、イロウズは、社会学の古典的研究を取り上げながら、感情を社会学的に捉えることに挑戦している。その一方で、感情を研究する社会学者に対して、彼らの感情についての捉え方が、心理学的言語を用いているものが多いこと、また、感情について取り上げている古典的社会理論が知られていないことを指摘している。

本書全体を通してイロウズが取り上げている古典的社会理論のうち、マックス・ウェーバー、エミール・デュルケーム、ゲオルグ・ジンメル①の感情理論と感情社会学の問題設定の方向性について確認しておこう。

マックス・ウェーバー(Max Weber)は、行為の類型論で、社会的行為として、目的合理的行為、価値合理的行為、伝統的行為、感情的行為②の四つを上げている。その中で感情的行為については、現実の感動や感情状態に動かされてなされる社会的行為と定義されている。たとえば、感情行為は、現実的な報復・享楽・献身・帰依のために要求され、そのときどきの気持ちを満たすためになされる。方向性としては、感情が社会

的に規範化されているという視点である。感情の形成過程に社会規範が関与するとし、また、積極的にある特定の感情を経験させるような作用を起こす場合も指している。

エミール・デュルケーム(Emile Durkheim)は、著書『社会分業論』で、「連帯」など社会的現実を構成する規定的な形態として感情を扱っている。感情に対する社会的作用ではなく、社会的なものへの感情の作用に焦点を当てており、感情が社会あるいは共同体の秩序の根底に内在していると考えられる。方向性としては、ある社会状況や社会条件がある感情をつくりあげるといふ視点であり、社会状況と感情をそれぞれより分化させ、対応させることによつて感情を社会学するということを追究している。

ゲオルグ・ジンメル(Georg Simmel)は、第一次感情と第二次感情を類別している。第一次感情とは、人が相互作用を営む場合にアプリアリに持ち込まれる社会形式として、そして社会関係に大きくかわるものとして感情を捉えることであり、他方で、第二次感情とは、特定の社会条件が特定の感情を心的な結果として生起させることである。方向性としては、感情による現実構成、つまり、感情が社会を作り上げるという視点である。そのため、感情的な現実構成の具体的なあり方、たとえば、それを促すような文化的装置の記述や説明を必要としている。

イロウズは本書の中で、先にあげた三つの代表的な立場とも違った視点から感情にアプローチしている。イロウズは、個々の感情が果たしている社会的機能を問う視点を持ち、社会制度・組織・集団あるいは相互作用などによつて特定の感情が統制・安定などの機能を担っていることを明らかにしようとしている。世界をもっとも社会的に構成している基

本的な次元は男性と女性であり、生殖を通して感情的な文化が生じるからである。社会において、ジェンダーという男性、女性という性別の規定がなければ、役割やアイデンティティが生じないからだ。しかし、それは、社会の中でジェンダーの規定が変化すれば、自己やアイデンティティへの影響があるということでもある。

現代の社会は、経済の複雑化やインターネットテクノロジーの発達によって急激に変動しており、自己を構成するものや私的・公的領域、ジェンダーの差異の基準が大きく変化してきている。イロウズは感情という概念を用いて社会構成、とりわけ、資本主義に着目し、資本主義で展開される市場を通して感情が形成されるとし、資本主義が感情によってその形態を変化させるといふ。本書では、こうした感情と資本主義が互いに定義しあつて生じる二重のプロセスを「感情的な資本主義」と名付けている。

イロウズは、全体を通して、感情的な資本主義という観点から、男性、女性を取り巻く親密性やアイデンティティを分析している。

第一部では、ウェーバーの議論をもとに資本主義の構成が、激しく特別な感情的な文化の構成と密接に関わっていることや資本主義の初期の特徴として感情が見られることを取り上げている。たとえば、労働における男女の役割や賃金の差への不満や嫉妬が挙げられる。ウェーバーの理論である「合理化」(rationalization)が初期の感情を台頭させると同時に、資本主義と結びついて人々の自己合理化が促進されるとイロウズは主張する。二十世紀におけるアメリカの大衆文化に著しく影響していたフロ

イトの精神分析を援用し、感情を精神分析と心理学的な方法を用いて、職場と家庭における女性の自己のあり方への理解を試みている。イロウズは、フロイトの精神分析による感情の様式を参照し、自ら新たな感情の様式を考察するために、ジョージ・エルトン・メイヨー(George Elton Mayo)のホーソン実験³⁾の例を取り上げている。メイヨーは、職場内の女性を対象にナラティブ・インタビューを通じて、感情と生産の関係や労働における問題点を心理学的・セラピー学的言説から分類し解釈した。この調査の結果、職場内の中で、感情や個性は女性の立場を支えるものであり、女性に寛容な職場では利益が上つたことや、他方で、そうではない職場では、労働者の家族関係で親と子の情緒的紐帯が失われ、感情が商品化され売買されることを指摘している。

この結果からイロウズは、職場内における監視や抑制の新しい方法を提示するのではなく、協同のために、職場内での「コミュニケーション」を取り入れ、道徳性を徐々に根付かせる必要があると主張している。人間関係に注意を払わない労働環境を構築してきたこれまでの資本主義を親密な関係に再構築するために、経営者・労働者のコミュニケーションの能力が必要になっていくことをイロウズは明らかにする。

また、第一部では、いかにして心理学やセラピー的言説がフェミニズムとつながっている問題であるかを考察しており、職場が女性労働者にとって居場所となるためには、人々の持つ権利として、平等の基準を再形成する必要があることを指摘する。同時に、社会学的視点から、フェミニズム運動は、性における平等や性から解放されたコミュニケーションを土台として「健康的」で親密な関係をもたらすとイロウズは主張する。

第二部では、イロウズが自己啓発書、女性誌、トークショー、支援団体、出会い系サイトを通して、人々の持つ感情の苦しみや第一部で取り上げた自己合理化への切望について言及している。イロウズは、自己を合理化し、自己実現を叶えようとする人々を調査対象者とすることで、アラハム・マズロー(Abraham Maslow)のナラティブセラピーの重要性を指摘する。

ナラティブセラピーは、治療者とクライアントの対等性を旨としている。かつてのフロイト派のセラピーでは、治療者はクライアントの一段上に立つており、間違った物語に囚われている患者を、治療者が正しい物語へと導く、という進展が一般的であった。しかし、マズローによれば、どのような物語になるかは平等な主体どうしの主観の持ち方の問題であり、「正しい」物語も「間違った」物語もなく、ましてやどのような主観にも依拠しない「客観的な」立場から見ただけ解釈や物語も存在しないと指摘している。つまり、理想の自分を実現しようとする際、過去を内省し、新しい未来を構築するために行動の変化を促し、表現する過程で、過去にあった問題を振り返り、現在自分が抱える問題を位置づけるよう促す。

イロウズは、かつてのセラピーのあり方は、治療者からの一方的なアドバイスであり、苦痛やトラウマを特別扱いしていると指摘する。イロウズもマズローと同様に、現実とは人々のコミュニケーションの間で言語を媒介にして構成されるものであって、「客観的現実」や「本質」などというものは存在しないと考える。それゆえに、ナラティブセラピーの普

及と確執は、市場や資本主義において様々な社会集団の操作によって物理的に理想的な利益と関連するという。同時に、自己実現に伴う苦痛の併存は、制度化された「感情的な領域」から生じてくるものであるとし、感情が商品やもう一つ別の資本として感情的な競争を引き起こしているとし唆する。その結果、資本主義が自己実現や「本当の自分」を求められるように人々を仕向けていると主張する。

第三部では、インターネットの出会い系サイト(match.com)を例にとり、メディアに媒介された感情・表現を通して感情が合理化する過程の縮図を示している。第一部では男性と女性の関係性が資本主義というシステムの関係を焦点にしていたが、第三部では、インターネットという新しい資本主義のシステムとの関係を焦点に当て、自己実現と他者との関係性を論じている。

インターネットで互いに出会いを求める際、人々は、自分自身や理想の相手を徹底的にカタログ化し、プロフィールにまとめて反映させている。また、彼らは出会い系サイトから送られてくる何千ものパートナーリストを通じて、理想のパートナーを検索することができ、文字媒体のテキストや自分の写真など視覚的な面をプロフィールに載せ、理想的なパートナーを見極めている。こうしたインターネットによって構築される出会いの場について、イロウズは、従来のロマンティック・ラブが現代では変容していることを、出会い系サイト利用者の女性とのインタビューを通して明らかにしている。

従来、「ロマンティック・ラブ」という理念は、即座に相手に魅力を

感じることで、すなわち、「一目ぼれ」とみなされ、相手の人柄の直感的把握が行われているということであると考えられてきた。アンソニー・ギデンズ(Anthony Giddens)⁽⁴⁾によると、ロマンティック・ラブという心的態度は、一方で、女性を家庭という「女たちの居場所」におしこめる働きをし、他方で、近代社会の有する「男性性」と、積極的に、また、根本的に結びつく働きをしており、女性の置かれた状況に二重の強い影響を及ぼしてきたという。

インターネットと関係性についてイロウズは、アーヴィン・ゴッフマン(Erving Goffman)の相互行為論を援用し、出会い系サイトは、匿名によって本物を見ることができないために、当惑をはらむ相互行為秩序の装置であると分析している。本書における、「当惑」とは、自己実現の損傷と自己が採用してきた相互行為のプラクティスの「確かさ」が揺らぐ経験のことであり、これによって、他者との親密な関係も揺らいでしまうことである。イロウズは、当惑が経済の複雑化やテクノロジーの発展のさまざまな形で姿を現して、私たちに他者との関係性への対処を要請していると指摘している。この当惑がある限り、本当の「私」ではいられず、同時に他者の当惑でもあるので、インターネットでの相互作用を重ねていくことで、当惑が伝播し、システム全体の脅威となると主張している。

本書の特徴は二点ある。一つは、心理学や精神分析の領域で扱われていた感情を資本主義と結びつけ、同時にこれまでの感情をめぐる言説を社会的に批判していることである。二つには、社会学の古典研究によつ

て方向づけられていた感情社会学のアプローチとは別に感情を社会学の中で方向づけることに成功していることである。感情的な資本主義というパースペクティブは、自己と他者よつて形成される親密性と資本主義やインターネットという領域を結び付け、私たちに新しい視野を示している。

註

(1) 岡原正幸ほか編、一九九七、『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代——』、世界思想社。

(2) 岡原正幸によると、ウェーバーの感情的行為について、感情社会学者の中では否定的な評価が多くなることが多いという。その理由は、第一に、感情は社会学の対象範囲からもともと排除されやすく想定されている。第二に、感情はあくまで行為の動機付けの側面にかかわり、それ自体は心的な機制あるいは行為の原因として設定され、その成立などが社会的に問題化されるわけではない。第三に、行為の諸類型の中で目的合理的行為を特権化するという事態を生んでいる。

(3) 照明や休憩時間などの物理的労働条件が工場生産性に及ぼす影響を検討しようとして計画された実験。この実験の結果、労働者の作業能率は、客観的な職場環境よりも職場における個人の人間関係が重要であるとした。

(4) Anthony Giddens, 1995, *The transformation of intimacy: sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press.

(一九九五、松尾精文・松川昭子訳、『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム——』、而立書房。)